平成２２年度第１回地域教育ネットワーク会議議事要旨

１　日　時　平成２２年７月３０日（金）１３：３０～１６：００

２　会　場　宮崎県立図書館　研修ホール

３　出席者　委員　１８名（欠席５名）
　　事務局１１名

４　内　容

（１）開会行事

（２）会長、副会長選出
　　会長　香川征治氏、副会長　藤﨑路子氏

（３）説明Ｉ
- 本会議の役割と検討事項等について
- 本課事業説明

（４）全体会協議

司会　　本課事業等の説明についてのご質問はないか。

○　学校支援地域本部事業のコーディネーターは、それぞれやり方が違うのか。

○　住吉地区では、住吉小、住吉南小、住吉中で指定を受けている。コーディネーターは、それぞれの学校のニーズにより取り組み方が違う。

事務局　延岡市の北方地区では、１名のコーディネーターが５小・中学校を回っている。学校のニーズと地域で取り組めることを調整して実施していただいている。特に最近では、授業の支援が増えている。

○　アシスト事業に興味をもっている。ビデオを見ていると学校を支援する取組にウエイトを置いて紹介されたが、企業が地域や家庭を支援している事例があれば教えてほしい。

事務局　本事業は、３年間の事業であり、まず学校支援を手始めに取り組んでいる。しかし、本事業は、家庭・地域支援も対象にしており、実際既に登録していただいている企業では、ガス会社が公民館にコンロを提供したいとか、携帯電話会社が、高齢者や保護者を対象に犯罪予防教室を開催したいなどの支援が提案されている。

　１年目の今年は、学校支援を中心に取り組み、これから家庭・地域支援へ広げていきたいと考えている。

○　企業の立場として回答したい。住友ゴムは、地域との共生をモットーにしている。実績として、地域の方を対象にした工場見学やグラウンド等の施設の開放などを実施している。

協議１　「企業の力を教育に！みやざきの教育アシスト事業」の推進について

司会　　現在１２４社に登録していただいている。企業側の立場としての感想等はないか。

○　これまでも工業系の高校とは繋がりがあった。また、企業経営者に高校で講話をしてほしいという依頼などもあった。これらはどちらかというと個人的な繋がりによるものであった。この事業では、誰もが支援を受けられる企業が把握できるので、いいシステムであると思う。私たちの組織の中に若手経営者の「飛翔会」というのがある。その若手も積極的に外に出て行って子どもたちに講話をするようになれば、プレゼンテーションの実践の場にもなる。いい取組なので、工業会の中で、登録企業を増やすように働きかけたい。

○　いい取組だと感じる。今まで、アシスト事業にあるような取組はあまり聞いたことがない。どこにどういったニーズがあるのかが分かるようになるので、取り組む環境も変わってくると思う。しかし、商工会議所に所属している企業は家族的経営が多いのでどのように啓発していくかが課題である。

○　本事業に２つ期待している。私たちは、地域とともにありたいので、新たなニーズの掘り起こしができるのではないか。また、我々は世界を相手に戦っていかなければならないので、これからの日本を支える子どもの教育には関心が高い。私たちとしてもいい人材を育てていく一助になればと考えている。

○　この事業に青年会議所としても非常に関わりやすい。この方向性も大賛成である。私たちも既に多方面にボランティアとしての参加をしている。今、稲作りで単発な活動ではなく、子どもたちを対象に稲の苗を作るところから収穫までの取組を実施している。この取組は地域の教育に寄与するものが多大にあると思っている。課題としては、会員は２００名であるが、今の取組は宮崎市の子どもたちが対象であり、団体の枠を超えて、県下に広がればと思う。

司会　学校の立場としてはどうか。

○　学校としては、この取組は大変助かる。本校では職場体験学習を実施している。地域に出て活動することで、机上では学べない刺激を受けており、生きた知識等を学んでいる。一流、本物の人・もの・ことに接することでかなりの教育的効果があると考えている。小学校と中学校では多少活用の度合いが違ってくると思う。小学校の方は活用が多いと思うが、中学校では教科の特性もあるので難しい部分もあるかと思う。しかし、私たちのできない部分に企業の方が入っていただくことは本当に効果が大きい。

○　幼稚園の立場では、遠足や園外活動は、昔は遊園地や大型の公園をリストにあげていたが、今は保護者とともに家族で行っているので、季節によっては、工場見学等を希望するところもある。そこで提案だが、施設開放をしており、食事ができる

施設があるかどうかのリストがあればありがたい。それがあれば、子どもたちを連れて行きやすくなる。そのような情報がホームページを通じてでも分かればありがたい。

司会　　レジュメにある企業と連携した取組等あればお聞かせいただきたい。

事務局　今、企業に登録を呼びかけるため、直接説明に出かけて行ってっているが、多くの企業が非常に協力的でありがたい。中には、既に地域の中での連携が図られているが、登録することのメリットはあるのかというご質問もある。例えば、その取組の幅が広がるとか、県内全域で取り組めることなど説明している。また、学校支援地域本部事業や放課後子ども教室推進事業でもこのシステムを活用していただきたい。

司会　　コーディネーターの立場ではどうか。

○　総合的な学習の時間等での活用が考えられる。放課後子ども教室でも外へ出て行くことへの子どもたちのニーズは高い。コーディネーターの立場として本事業はありがたい。ホームページを見て分かるのであれば先生たちもすぐのってこられるのではないか。

司会　　放課後子ども教室に関わられている立場としてはどうか。

○　放課後子ども教室を実施しているが、多くの施設等でできるなら子どもたちに探検させ学ばせたい。今自分たちの取組に一社が協力してくれており助かっている。子どもたちは外に出ることを楽しみにしている。大いに活用できるのではないかと期待している。

協議２　関係団体等（特に社会教育関係団体）の連携・ネットワークづくりについて

司会　今まで他の団体と連携して事業等を進めていった事例を紹介していただきたい。

○　年々会員減少とともに少しずつ組織が崩れていっている。これをどのように立て直していくかが今後の課題である。そのような中で、実際、「食と生活」のテーマで、他の女性団体等が連携して一緒に勉強している。また、子育てボランティアをしているが、若いお母さんの様々な悩みを聞く機会がある。その中で分かることは、若い母親たちの悩みを解決する場所がなかなかないことである。

○　子ども会は、企業との関わりはあまりない。地域や行政と交流がある。子ども会は、約３００人のジュニアリーダーを育てている。子ども会としては、稲作りとか漁業組合に協力していただいての魚の放流等の取組事例がある。

○　ボーイスカウトの場合は、各地域の自治体と連携して取り組んでいる。また、募金などは福祉団体と連携して実施している。昨年度は、「子どもゆめ基金」を受けて、子ども会、青年団、子ども劇場等と連携して事業を実施した。宮崎県青少年育成団体の１６団体と連携はなかなか難しい。連携するとなると共有できる目標が必要となる。実際には団体間では、子どもを奪い合う状況もあるが、部分連携は可能

である。

○　成人式のお手伝いや地域のお祭りへの協力とか行事などに参加している。その中でガールスカウトのアピールもしている。我々としてもみやざき学び応援ネットを活用していきたい。

○　地域の中に企業も少なくなってきており企業との連携は難しい。各小学校では草取りから収穫まで日常的に連携している。地区ごとの鎮守神社の神楽や祭り等地域と一体となった活動が展開されている。

○　ホンダロックの交通安全教室や県立宮崎海洋高校の海での体験学習に積極的に参加した。また、警察署に交通安全の講話やパトカー・白バイの体験試乗など積極的にアプローチして、子どもの職業観や夢を育てる意味からも参加させていただいた。地域の中では、「こんにちは訪問」と題して、敬老の日の訪問、一人暮らしのお年寄りの訪問など、自治会や老人クラブ、民生委員の方々と連携して実践した。これらの取組を通して、地域の一員であることを認識させることは大切なことである。これらの取組を行う場合は、誰が企画についてのお世話したり調整するかが大切である。それができればネットワークづくりもうまくいくのではないかと思う。

○　ＮＰＯはネットワークなしでは活動できない。繋がりを求めつつ広がりをみせてきたし、これからもその姿勢が大切であると思う。様々なところで顔を合わせることを頻繁に行っている。そうすることで情報を得ることができる。アシスト企業を家庭が知ったら大きな目に見えない効果も期待できる。また、企業が家庭教育を大切にしているということが分かれば、もっともっと深みのある社会が築けるのではないか。大いに期待している。

○　スポーツに関するプログラムの提供など連携をしているが、施設管理運営を受託して運営している。以前は、体育施設は、単純に貸してくれる施設であったが、自分たちの地域の施設だという意識が芽生えてきていると思う。また、宮崎市の地域づくりの取組の中でスポーツ元気部会に所属しているが、その中でもプログラムの提供をしている。

司会　　行政の立場からいかがか。

○　ネットワークは今までもあった。既存のネットワーク、埋もれているネットワークをあらためて掘り起こすことも大切ではないか。ネットワークといえば、やはり世話役がしっかりしないといけないと思う。

司会　　最後にまとめとしてお話を伺いたい。

○　ネットワークを継続するためには、負担とメリットのバランスが大切だと思う。持続可能なものとするためには、企業の力を高めるという考え方も一つあるが、今の学校を中心とした取組をしていれば、必然的に地域や家庭に波及していくと思う。教育の質を高める取組であるが、逆をいえば企業の質を高める取組でもある。双方向の取組が大切であり、両者をいかにマッチングさせコーデイネートするかが大切であると思う。

分科会協議

〔地域教育部会〕

説明Ⅱ　各事業の現状と推進方策について

・　学校支援地域本部事業

・　放課後子ども教室推進事業

司会　　説明についての御質問はないか。

○　４点ある。①授業における企業の活用の仕方は、どのような形態があるか。②学校にはどのような方法で周知しているのか。③金銭面での支援はできるのか。④メリット・デメリットをどう捉えているか。

事務局　授業における活用については、様々であるが、企業によっては完全に企業主体でプログラム化されたものもあるし、教師とティームティーチングで実践されるものもある。学校には、学び応援ネットの企業バンクの運用と活用の周知の依頼を行った。また、各地区の校長会に伺って周知もしている。企業への旅費・謝金等の金銭面の支援は、考えていない。企業へのメリットは、企業の教育活動の紹介による経済効果と社会に貢献できる人材の育成ではないか。

事務局　現在、県として長期計画を作成中である。また教育委員会としても第２次教育振興基本計画を作成している。アシスト事業は、今までになかった教育システムであり、計画に位置づけるかどうか検討中である。

○　これからの教育水準の維持向上が重要な課題であり、そのために本事業は、地域格差の是正、公正公平性の面からも重要であると考える。財政の問題もあり、痛みも分かち合うことになると思うが、いい方向に推進されればと思う。また、活用について、積極的に啓発してほしい。

○　ホンダロックが実施している交通安全教室では自社製品も提供している。その中で、子どもたちは自分の職業観が育っている。小さい頃からこのような取組があると、地元での就職希望も増えるのではないか。

司会　子ども支援のための事業、事業間の連携についてご意見はないか。

○　３年間の事業を持続可能なものにするため長期的なビジョンをもって取り組むことが大切である。連携といえば双方向性が重要であり、そのためにはいくつかのポイントがあると思う。「意識づくり」では、関係者への啓発が大切である。「場づくり」は、関係者が一堂に会する場が必要である。「組織づくり」は、個人的なつながりではなくしっかりとした組織としての体制が重要である。「情報づくり」は、例えば、企業がどれだけのことに取り組んでいるかの啓発が大切である。登録されている企業が支援できる情報の提供をしっかりしてほしい。「資金づくり」は、実際には難しいが、それが無理であればマンパワーの組織作りが大切であると思う。

○　コーディネーターは人だけではなく、多様化することが大切である。
コーディネーターグループ化、だれでもできるようにマニュアル化が必要であり、ホームページもその一つである。アシスト企業側のネットワークづくりも大切では

ないかと考える。企業同士でできることのパッケージづくりやセットメニュー化も望まれるのではないかと考える。

○　３回の会議の中でどのような方向性を出していくか難しいが、私たち委員も積極的に意見を出していきたい。

〔家庭教育部会〕

説明Ⅱ　各事業の現状と推進方策について

・　家庭教育支援に関する宮崎県教育委員会の施策について

司会　説明についてのご質問はないか。

○　それぞれの家庭に直接関わることはなかなか難しいと思うが、ＰＴＡに関わると考えればよいのか。

司会　必ずしもそうではない。

司会　家庭教育支援に関して、個人もしくは団体として日頃から考えていることを伺いたい。

○　子育てを終えた自分たちの世代では学校との関わりがあまりない。だからＰＴＡと一緒にやりましょうと言ってもなかなかうまくいかない。

出前講座に取り組んでみたが、家庭教育学級の窓口である学校の管理職の意識によって対応の違いがある。学校の年間行事の中に団体として関わるのはかなり難しい。

○　子ども会の活動を進める中で、家庭の教育、保護者が家の中で教育をどうされているのかが不安である。保護者の子どもに対する教育がひ弱な感じがしている。我々が色々な企画をしても、保護者の声かけで参加しない子どもがいる。集団登校の状況を見ていても、保護者の送り迎えが多い。そういう子どもが将来どうなるのか不安である。そういう現状と家庭教育支援をどう結びつけるかが難しいと感じている。

○　幼稚園では体験型保育の一環で「餅つき大会」を実施している。その中で、若い保護者はつきあがった餅をちぎることもままならない現状があったため、社会福祉協議会のスタッフに指導者として参加していただき、道具の調達の仕方やもち米の蒸し方等のアドバイスを保護者にしていただいた。そのことが、間接的ではあったが若い保護者への家庭教育支援につながっていると感じた。

○　自分自身も核家族の中で育った世代である。よって、地域で子どもを育てる環境をつくる一助になるような活動をしていけばよいのかなと考えている。子どもに保護者の絵を描いていただくとか工場内を会場に親子でウォークラリーをやっていただくような取組を企業では行っている。親子で「今日は楽しかったね」と言い合えるような体験活動を提供できるとよいのではないかと考えている。

○　今の子育て中の保護者世代については、テレビが普及した時代に育っており、昔と比べて、人と人とのコミュニケーションが不足しており、社会性の乏しさを感じます。

親の社会体験（仲間づくり等）の必要性を感じます。本県では育児放棄（ネグレクト）が多く見られる。社会全体が子育て（子育て中の親）の応援をしているとい

うことを発信することが大事だと思う。

宮崎市では公立大の学生保育サポーターや高校生が子育て支援センターに行き、新生児のお世話をする体験などをしている。

○　問題点が２点ある。１点目、本当に家庭教育学級を受けていただきたい方が受けていないという現実がある。

２点目はタイミングの問題。実際に小中学生の子どもをもつ保護者を対象に実施しているが、実は子どもが産まれる前の方々への教育が大事である。青少年教育というか、そこの部分を強化していく必要があると考える。子どもができてすぐにネグレクト、養育放棄が起こっている。子どもをつくることに関して意識が低いという状況がある。